

## 1. 研究目的

近年、近所付き合いの程度は、都市・地方・職業を問わず低下している。そこで、地域社会の「人付き合い」をテーマに考え、川崎市にある既存の複合施設を台材に、老人と子どもの間に、自然にコミュニケーションが生まれる新しい空間を提案する。

## 2. 調査と分析

川崎市に、1階は老人の集い場所「憩いの家」、2階は児童館「子ども文化センター」となっている複合施設がある。そこでは、同一建物内で幼児から高齢者までの幅広い世代に利用されているが、制度的な理由から、現在は直接の関わりがもたれていない。実際に施設を見学に伺いインタビューに行った結果、以下の問題点が明らかになった。

- ① 同じ建物内にある2つの施設は、玄関が別々に作られているため、子どもと老人の交流が少ない。また互いに顔を合わせることがない。
- ② 2階の子ども文化センターでは、利用者人数が、多い時には子ども達が廊下に溢れ、スペースが不足してしまう。
- ③ 2階への移動は階段に限られ、複合施設にも関わらず不特定多数の人が利用できない。

## 3. コンセプトの立案

利用者の見える出入口空間の創出

複数の利用者は、それぞれ目的があってこの複合施設を利用している。互いに直接的な関わりは無くても、どこに誰がいて、何をしているかが何となく分かり、顔見知りになることから関係をはじめることが地域社会の一番の理想ではないかと考える。

## 4. デザイン展開

### ① 入口ロビーの増設(図1)

建物に入る際、必ず通るのは出入口である。別々にあった出入口を1つにし、ロビーに1階と2階をつなぐ大きな吹き抜けのスペースを作った。そこでは両者が行きかい、出入する人が見え、また子どもが遊ぶのが見えるために、顔見知りになることが期待できる。

### ② 1, 5階の共有スペース(図2)

1, 5階は、2階のスペース不足を補う役割がある。子どもと老人の交流の場としてスペースを自由に利用することができ、少数のソファやテーブルを置き、広々と感じる開放感あふれる空間にする。

### ③ バリアフリー対策としてのエレベーターの設置

2階の文化センターには、授乳室がある。ベビーカーを利用する人が2階や1, 5階でも利用できるように、エレベーターを設置する。ベビーカーを利用する人だけでなく、車椅子や老人など、不特定多数の人が利用できることを狙いとしている。

## 5. 完成図



▲全体図



▲図1 入口ロビー増設



▲図2 1, 5階フロアー

## 6. 結論

施設の利用者に意見を伺ったところ、出入口を1つにしたことで、「顔を見て挨拶することができるのがとてもいいと思った」や、「直接関りなくても、だれがどこにいるかという存在認識もできる」という感想をいただいた。このことにより、施設の利用者からはプラスの意見をもらえたため、コンセプトである「利用者の見える出入口空間の創出」は、目的を達成したと言える。

今回は建物に入る際、必ず通るのは出入口ということでロビー付近を中心に増設ということだったが、今後の課題として室内のゾーニングに合わせてレイアウトを変えるなどの対策を考えていきたい。

## 文 献

- [1] <http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/report/rp0308.pdf>  
 幼老複合施設における異世代交流の取り組み